西光

第180号　秋彼岸号
令和元年9月7日発行

浄土宗西山禅林寺派
雲龍山 西光寺 住職 大塚靈閑
〒671-0101　姫路市大塩町229番地
TEL:079-254-0351

町探検でお寺に来てくれた大塩小学校2年生のみんながらのお礼の絵手紙

秋のお彼岸法要

9月21日（土）13:00～

13:00～ お彼岸のお勤め
13:30～ 塔婆回向
14:00～ お説教
15:00～ 塔婆回向

塔婆回向の供養料は1霊300円です。お一人ずつ戒名を読み上げ、御詠歌をあげながら供養させて頂きます。

説教師
加古川市　龍泉寺副住職
酒見真暢（さかみ しんちょう）師

霊閑だより

ココロにゆとりを

東京歌舞伎町のホストとして最近一躍時の人になっているローランドという方がいます。自らのオーラを前面に出して数々の名言を繰り出しているのですが、その彼がある時、心の余裕を海に例えていました。海に赤い絵の具をちょっと落としても、海の水の色は全く変わりません。ではコップに赤い絵の具を少し垂らすとどうでしょう。真っ赤になってしまいます。赤い絵の具が私たちの怒りや愚痴(ぐち)で、心の余裕は水の量なのです。自分にはどれくらいの水の量があるかは客観的には分からないものですが、水の量を増やしていけば、些細なことで振り回される回数も減っていくものだと教えてくれています。

最近煽(あお)り運転がよくニュースになっていますが、彼は煽られても気にならないそうです。割り込み運転されたら、「大好きな車に乗る時間がちょっと増えたな、どうぞどうぞ」と思い、後ろから煽られたら「なんか嫌なことでもあったのかな～うん、よしよし」と思うそうです。いつかの門前掲示板に書いた「けしからんと怒るより　気の毒だなと許してあげよう」の心です。心の余裕、ゆとりはやはり大事ですね。

先日、恥ずかしながら車の免許証の更新で違反者講習を受けました。その際、教官が今後特に注意してほしい、つまり積極的に取り締まると言っていたのが、横断歩道で歩行者がいる場合の一旦停止です(皆さまもどうぞお気をつけください！)。日本のドライバーはとにかく横断歩道で一旦停止しないそうです。ある実験結果によると十人に一人も止まらないとか。確かにヨーロッパなどに行くと、横断歩道でなくとも、歩行者が渡る意思を見せて待っていれば必ず車は停止して、歩行者を先に行かせてくれます。ちなみに東南アジアなどでは、待っていては永遠に道は渡れません。ドライバーに止まる気など更々ないので強引に渡り車を止めるしかありません。

話が逸れました。車に乗ると些細なことでもイライラしやすいように思いますが、どうぞ心にゆとりを持って安全運転を心がけて下さい。

続・靈閑だより

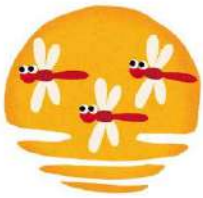
～見方を変えると味方になる～

なんだ、ダジャレか、と思われたアナタ、もう少しお付き合い下さい。先ほどローランドの見方を変えるやり方をご紹介しましたが、こんな話もあります。

ある村に晴れても雨が降っても泣いているおばあさんがいたので、お寺の和尚さんがその理由を尋ねました。おばあさんには息子が二人いて、一人は傘屋、もう一人は染め物屋をしているとのことでした。雨が降れば染め物ができないだろうと悲しくて泣き、晴れの日は傘が売れないだろうと思い泣いていたのです。それを聞いた和尚さんが「晴れた日にはさぞたくさん染め物ができるだろう。雨が降れば傘が売れ繁盛するだろう、と喜ばなくてはならないですよ」と諭しました。

どんな人も皆、思い通りにいかないという苦しみをたくさん抱えながら、それに向き合い生きています。それを少しでも楽にするにはどういう風に考えればよいのかを、お釈迦様は教えて下さっているように思います。

暗くジメジメした心からスッキリと晴れた秋空のようなさわやかな心を保っていきたいですね。



寺子屋

寺子屋では、この『西光』の「気になる…」シリーズでお書きしているような仏壇のお祀りや仏事における作法やしきたりに関することをはじめ、知られざるお経の世界を紹介してみたり、仏教を身近に感じて頂けるようなお話をしています。最初に赤いお経の本(浄土宗西山勤行式)でお勤めもしていますので、お経の練習もできます。

現在はだいたい二十名弱くらいです。ほとんど一回完結型でやっていますので、途中からでも全く問題ありません。毎回の話す内容を事前にお知らせできればよいのですが、住職の怠け癖により直前まで私も何を話すか分かりません。気楽にやっていますので、お気軽にどうぞ。

【今後の予定】

九月十七日(火)
十月四日(金)
十一月七日(木)

いずれの日も午後一時半～午後三時

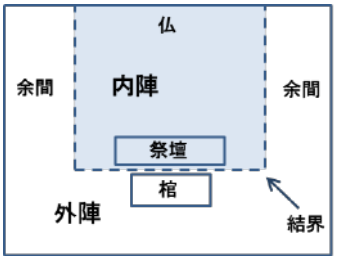
気になる・・

遺骨と遺影の置き場所

四十九日が済んで、これはどこに置けばよいのだろうと悩むものが遺骨と遺影です。もちろん決まった正解はないのであくまで参考までに。

まず遺骨についてですが、粗末にならぬよう仏壇の中の空いたスペース、もしくは仏壇の隣に小さな台などを置いて、そこへ据えるという形がよいかと思います。

仏壇の中へお骨を置くということについて少し解説しておきます。お寺さんによっては仏壇の中にお骨は入れてはいけないと言われる方もあります。おそらく死＝穢（けが）れという考えから、不浄な肉体の一部を、仏さまという尊い方の近く、同じ空間に置くことが憚（はばか）られるからだと思います。確かにお寺の本堂で葬儀を行う場合、棺は外陣（げじん）と呼ばれる外側に置きます。仏さまがいらっしゃる内陣（ないじん）は神聖な空間として、どこのお寺も内陣と外陣の間には聖と俗を隔てる結界（けっかい）がしてあります。これも遺体という穢れを神聖な領域に入れることを憚ってのことです。しかし現在では昔ほど死＝穢れという意識はないように思います。むしろ自分の伴侶や両親など大切な家族を穢れたものとして扱われるのは大変受け入れ難いものがあります。私もそう思います。



今は仏壇も小型化が進んでいますので、あれもこれも仏壇内に置くのは難しいので、仏壇の隣に台や小机などを置いて、故人のゆかりのスペースとするのも良いかと思います。骨箱や遺影の他にも、時計やメガネなどの遺品、スナップ写真やアルバムなど身近に故人を偲ぶことができる空間があれば素晴らしいことかと思います。仏壇に供えきれないお供え物も置けますし、仏壇に入れるには少し気が引けるタバコやお酒も仏壇外のスペースですと気軽に置けそうです。

遺影についてですが、仏教的にこうしないといけないということはありません。昔ながらに仏間に先祖代々の遺影とともに上げるのもよし、仏壇の横に飾るもよし、お役御免で供養するもよしです。そもそも遺影は葬儀の際に参列者に分かりやすいように便宜上作るものですので、葬儀が終われば用がないといえばありません。遺影は家で飾るにはサイズも大きいですし、無理に飾ろうとしなくても、元の写真を写真立てに入れて飾っておいてもよいと思います。どうしようかとお困りの場合はどうぞ遠慮なくご相談下さい。

びんずるさん
～本堂の縁の赤い人～

西光寺の本堂の正面左側に全身赤い色で塗られたお方がいらっしゃいます。一体誰なのかよく分からないけど、とりあえず手を合わせておこうか・・結構気になっている方が多いのではないかと思うのです。

実はあの方は仏さまではなく、お釈迦様のお弟子さまの一人で、賓頭盧尊者という方です。「びんずるさん」と親しみを込めて呼ばれています。お釈迦様亡き後、お釈迦様の命により仏法を護持し、人々を救済し導く役割を持った優れた十六人の弟子（十六羅漢）の第一番のお方

です。法事などでおあげする『阿弥陀経』というお経の冒頭部分にも登場します。優れたお方であったので、中国ではお祀りの対象となり、食物の供養をしたことから、食堂に安置されたようです。それが日本では、西光寺のようにお堂の縁や堂内の外陣に置かれ、お祀りされるようになりました。

俗信ではありますが、「撫で仏」として親しまれ、自分の身体の悪いところと同じ部位を撫でると治るという除病の功徳があるとされています。いろんな意味で頭を撫でる人が多いのか、頭の色が他の部位より薄く、ツルツルしているようです。

ちなみに下の写真は西光寺が所持しておりますびんずるさんの掛け軸です。縁側にいらっしゃる赤いびんずるさんのような柔和なお顔とは似ても似つかぬ鬼のような行相でこちらを睨んでいます。びんずるさんは説法に優れ、獅子吼第一ともいわれました。獅子吼とは、まさに大塩の祭りの獅子そのものです。その説法が獅子が吼え立て百獣を恐れさせ従わせる様子に例えられています。そんな異論反論を許さない厳しさがこの怒った行相に描かれている所以でしょうか。しかしあまり怒っていては皆に好かれないからか、西光寺のびんずるさんは、なんとも仏のような優しい顔をしてらっしゃいます。

びんずるさんは多くのお寺で出会うことが出来ます。また観光でお寺に行かれた際には是非チェックしてみて下さい。

【ご逝去の報】

慎んでお悔み申し上げます。
生前の温顔を偲びつつ、
お十念を捧げます。

梅井　黒澤チイ子さん　八十七歳
七月一日没
東ノ丁　梶原哲さん　八十二歳
七月七日没
宮本丁　瀬田光夫さん　九十五歳
七月十五日没
木場　楠要さん　九十一歳
七月二十一日没
東ノ丁　湯谷操さん　九十九歳
八月五日没
北脇丁　澤井伸一さん　七十歳
九月三日没
中ノ丁　松本ふみ子さん　七十四歳
九月六日没
中ノ丁　宮浦いくゑさん　九十四歳
九月七日没

【西光寺役員の去就】

【ご逝去】総代　梶原哲さん

去る七月七日、総代の梶原哲(大道(だいどう)梶原)さんがご逝去されました。

梶原哲さんは私が生まれるよりも前、母が西光寺へ嫁いできた頃の昭和五十四年より今日に至るまで、四十年もの永きにわたり西光寺総代をお務めになられました。

任期中には本堂・庫裏の建て替え、鐘楼や山門の改修などの事業を次々と推進され、二度の善導忌・五重相伝会の大法要でもお世話になりました。度々総代会を開いて熱く意見を交わし、お寺の歩むべき方向性を示して頂きました。今は亡き先代住職を常に支え、私が住職になるまでの橋渡しをして頂きました。その多大なる功績に厚く御礼申し上げます。

門前掲示板

八月　常が大事　コツコツがコツ
九月　死してなお、親は子を育てる

後記

トイレに三体のお地蔵さんをおいています。その下に木の台を左上の写真のようにおいてみました。次にトイレに入ったときには左下のようになっていました。どうやら息子が、左のお地蔵さんには前にお供え物のおにぎりがないのが可哀想に思って、台をひっつけて真ん中におにぎりを持ってきたようです。